

#サステナ東大阪 令和4年度

「一日一回 SDGs にトライ de

東大阪市の魅力爆発大作戦」

## 活動報告書

令和4年11月22日

参加者一同

# 活動報告書

A:「東大阪市の未来にトライ」班

## A 班活動報告書

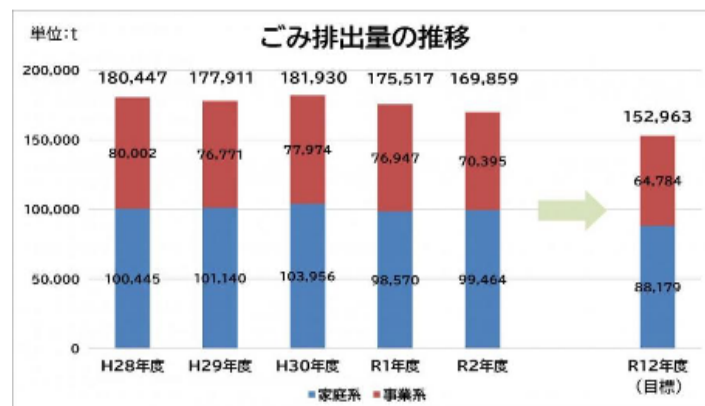


### 1. 東大阪市における課題

東大阪市が今抱えている課題をいくつか挙げてみると

- ★若者の減少
- ★お年寄りの増加
- ★生産年齢の減少
- ★労働者の減少
- ★ゴミの分別及び削減

これらが主な課題になります。その中でも今回はゴミの分別及び削減について課題解決に向けて考えていきたいと思ます。



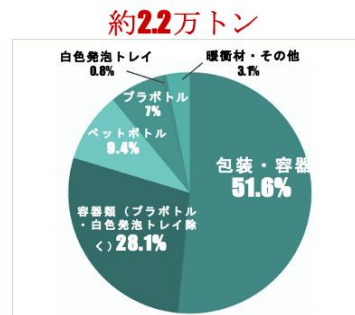
「東大阪市|ゴミの排出量」より引用 <https://www.city.higashiosaka.lg.jp/>

東大阪市では年間約 17 万トンものゴミが排出されています。

その中でリサイクルできるのがプラなどの資源ごみですが、現在年間で約 2.2 万トンのプラスチックごみが東大阪市で排出されています。家庭から排出されるプラスチックの割合として包装や容器の割合が 52%と大半を占めています。現在、東大阪市の人口は 50 万人を超えており、大阪府の中でも 3 番目に多い市となっております。暮らしている人が多いということは、日常生活におけるゴミの量も多いということになります。右の図がそれを表したものになります。

## 環境問題による課題

東大阪の年間プラスチックゴミの排出量は



包装・容器が占める割合が

**52%**

## 2.解決方法

### ■解決方法

「プレゼントや記念品に記念品などの包装を、布に」

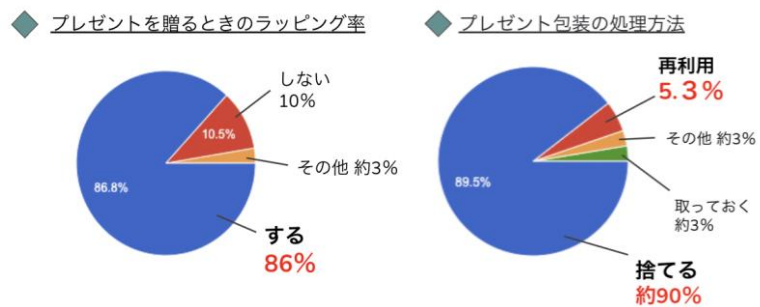


### ■なぜ布が良いのか？



まず、風呂敷などの利用で日本の文化を実感できる、開けるときに音が出ない、中身が見えない、お弁当を包むなど多様な用途がある、スカーフにするなどラッピングごとプレゼントができます。そして布であれば加工をせずに使用が可能です。以上が布包装を導入するメリットになります。

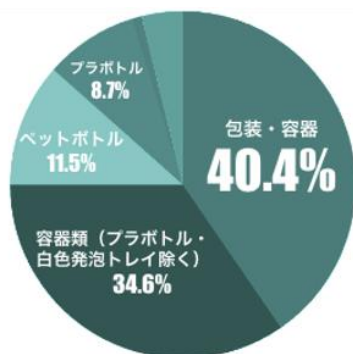
## ■アンケートによる調査結果



では本当にプレゼントする時の包装が捨てられているのでしょうか？実際にアンケートを行いました。左側の表、プレゼントを贈るときはラッピングをしますか？という問いに対し「する」の回答が86%、そして右側の表プレゼント包装の処理方法として90%が「捨てる」と回答。再利用は5%とかなり少なく再利用方法としては「使える時に使う」「収納箱にする」などの声。このプレゼント包装の再利用率を上げるためこのような方法を提案しました。

## 3.実現したら、東大阪市に起きる変化

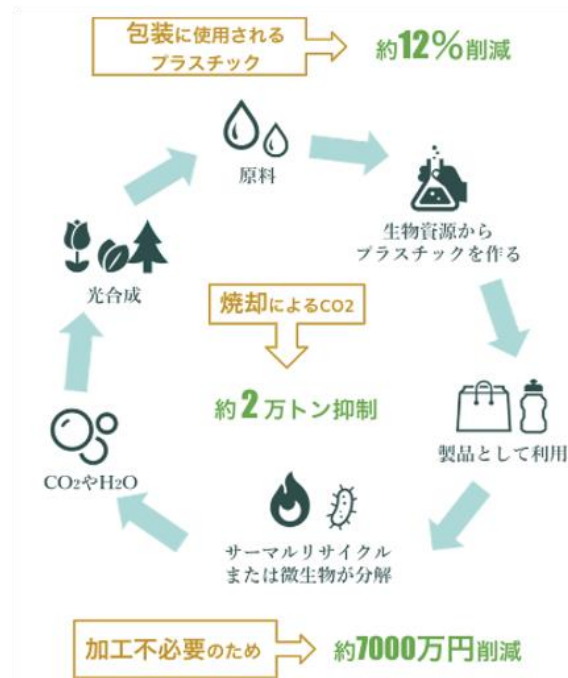
「無駄なプラスチック容器」をやめ、「再利用できる布」を導入したら、確実に東大阪市のゴミ量を減らすことができます。調査によると、東大阪内の雑貨全店は約5800店舗あります。1店舗から出るプラスチックごみは約0.7kg、つまり年間約4,000トンのプラスチックゴミを削減することが可能です。



右図は東大阪の年間ゴミの排出比率を示しています。その中に容器類はゴミの34.6%を占めています。プラスチックから布に変えることによって、約4000トンのゴミを削減し、包装に使用されるプラスチックごみを年間で約12%削減することができます。さらに、右下の図が示すように、加工をしなくても良いことから約2万トンの二酸化炭素の発生を抑え、環境に優しい取り組みです。また、加工不必要のため、人件費などの費用約7000万円のコストを削減することが可能です。

包装の再利用率を上げることでの特長としては、企業側へは「コスト削減」「環境保護に貢献できる」「新規顧客の獲得」主に三つのメリットがもたらされます。個人へは「海洋ゴミの削減」「家計費削減」（「食の豊かさ」などのプラスの影響が挙げられます。このように脱プラスチックは環境だけでなく、企業や個人にもさまざまなメリットをもたらします。

これからの時期はクリスマス・新年会などでケーキやプレゼント等の多くの包装が見込まれます。インターネットが普及し、イベントごとに力を入れている人が多い今、包装をプラスチックからお弁当を包む、手芸やハンドメイド、テーブルクロスに再利用できる布に変えることによってごみを減らし再利用の向上が見込めます。



#### 4.所感等

東大阪市の4大学合同で行うSDGsプロジェクトに参加して、SDGsへの考えが深めることが出来て、貴重な体験をすることが出来ました。初めは、SDGsとは何なのか、何をすれば良いのかがイマイチ理解していませんでしたが、ワークショップや班での話し合い、大学のゼミ、自主学習等でSDGsの理解を深めることができ、環境への配慮や日本或いは世界が今どのような問題を抱えていて、これからどのような方向に進んでいけばより良い社会になるのかが理解できました。また、最終的に東大阪市版のSDGsを作るということになり東大阪市の課題や改善点が見つかり、東大阪市ならではのSDGsの取り組みの仕方があってそれを学ぶことができ、それらを HANA ZONO EXPO では上手く表現できたかなと思います。

私たちA班はプラスチックごみの削減をテーマにして、プラスチックで包装されているものを布に変えて削減しよう、という内容の発表を行いました。この発表をするにあたって何度も話し合いを繰り返し、資料を試行錯誤しながら作成しました。その結果、サステナ東大阪2022大賞を獲ることが出来て、今までの行動が報われてとても嬉しかったです。4大学が入り混じったグループ編成だったので最初はコミュニケーションをとるのが難しい部分があったと感じましたが徐々に打ち解けられたと思います。また、中々他大学の学生とこのようなプロジェクト活動をする機会が無かったのでとても良い刺激になりました。例えば、SDGsの考え方や一つ一つのアイデア、資料作成などで普段とは違った刺激をもらうことができ、良いところは真似するべきだと思いました。

これから、この一連のプロジェクト活動で学んだことをどう生かすかが大切だと考えます。SDGsのこれからの在り方を考えたり、もっと多くの人に広める活動をしたり、自分自身が肌で感じたこと、学んだことなどをこれからの大学生活やもっとその先に生かしていきたいと感じました。



# 活動報告書

B:「SDGs にトライ大作戦」班



## B 班活動報告書

### 1.はじめに

私たちは本件プロジェクトを実行するに際して、東大阪市の抱える SDGs の課題発見から始めました。課題として主に 3 点挙げられました。1 つ目は工場からの二酸化炭素の排出です。東大阪はモノづくりの町として知られています。金属製品、鉄鋼業、電気機械などの中小企業が多く集まる東大阪市では、工場からの二酸化炭素も多く排出されています。工場からの二酸化炭素の排出は、個人では解決することのできない、社会的問題です。そのため組織単位で問題解決に取り組む必要性があります。また二酸化炭素の削減は SDGs 17 の目標の 7「エネルギーをみんなに。そしてクリーンに」と 13「気候変動に具体的な対策を」を達成することにも繋がります。

2 つ目は人口が減少していることです。この問題は東大阪市だけの問題ではありません。日本では、今もなお人口が減少し続けています。結婚をする人が少なくなっただけではなく、子育てをする地域の環境が整っていないことが、人口減少に影響していると私たちは考えました。SDGs 17 の目標の 1 つである、11「住み続けられるまちづくりを」を達成する必要があります。住み続けやすくなった町には人が増加し、働く場所も増えることでしょう。そうすると 8「働きがいも経済成長も」を達成することができます。

3 つ目は放置自転車や自転車のマナーが悪いということです。東大阪は大学が 4 校もあり、さらに住宅地もかなりあるので、多くの人が街に集まることとなります。そのため自転車通学する学生や、子どもを自転車の後ろに乗せて運転する親の姿が多く見受けられます。自転車は自動車と違い、免許習得の義務がなく交通ルールを無視して走行する人がかなり多いです。また東大阪市にはスーパーマーケットや商店街が多くあります。少しの移動で普段の買い物をすることができるので、自転車を利用する人が多くいるのではないかと感じました。自転車に乗る人が多いことで、放置自転車が増えたり、悪質な運転をするという問題が東大阪市にはあります。東大阪市の自転車問題を解決することは、SDGs 17 の目標の 11「住み続けられるまちづくりを」を解決することができます。

このように私たちは東大阪市の大学に通う上で、課題をたくさん見出しました。また課題の数々を解決することは、SDGs の 17 の目標を達成することにも繋がると私たちは考えました。そこで私たちは東大阪市民が生活をする上で、SDGs を意識して生活するための案を模索しました。私たちが提案したのは、SDGs のラベルを商品に貼るという試みです。

## 2. 今回の取り組み内容

今回のプロジェクト全体のゴールとして、「東大阪市民がSDGsを自分ゴトとして捉えられるような周知・啓発の方法ができる」ということが掲げられていました。そこで私たちB班は、自分ゴトとして捉えてもらうためには、市民の皆様にも馴染みのあるものや、身近なことから始めることができるSDGsの取り組みであるべきだと考えました。まず私たちが行ったことは、東大阪市内にゆかりのあるものや有名品、特産品などを調べ、そこからなにかアイデアが生まれ出せないかと考えました。東大阪市内役所で行われた第1回のミーティングの際に、福井県丹南地区や北海道上川町のSDGs取り組み事例をお聞きしたことから、私たちはこういった考えに至りました。特に北海道上川町の事例は、生え変わりのために落ちてしまった鹿の角という、地元の方々に馴染みのあるものを活用してSDGs活動を行っており、今回のプロジェクトを始めるうえで参考にしました。

まず、私たちは全員が東大阪市内にある大学に通っているにも関わらず、東大阪市のことをあまり理解できていないという現状を受け、東大阪市内には何があり、一体何が有名なものかということを探りました。調べた上で挙げられたものが、工場やラグビー、ラグビーボールをモチーフにしたラグカレーパン、なにわ刷毛などでした。その中でも私たちは、ラグカレーパンに焦点を当てました。東大阪市内には、花園ラグビー場というラグビーワールドカップも開催されたほど有名なラグビー場があり、東大阪市民ではない私たちですら「東大阪市内といえばラグビー」となるほどであったため、東大阪市民の皆様にとってラグビーはとても身近な存在だと感じました。さらにそれをモチーフとしたカレーパンを使ってSDGs活動を行えば、よりSDGsを身近に自分ゴトとして捉えていただくことができると考えた結果、ラグカレーパンに焦点を当てました。

まずこのカレーパンを使用する案として挙げられたのが、工場などから出る廃棄される食材を使用してカレーパンを作成するという案でした。廃棄される食材を使用することで、ゴミが減少し、ゴミを燃やす際に排出される二酸化炭素の量も減少させることができると考えました。しかし、廃棄される食材を使用したカレーパンだけでは、今回のプロジェクト全体の目的である「東大阪市内として全国に誇れるSDGsへの取り組みを確立すること」を達成することが厳しくなると感じました。東大阪だけ見れば、ラグカレーパンを使用したSDGs活動というのは親近感が湧きやすく、皆様に取り組みただけだと思ったのですが、それをゆくゆくは全国に広げるとなると、あまり自分ゴトとして捉えていただけないのではないかと考えました。

そこで私たちは、「SDGsラベル」という、SDGs貢献ができる商品（廃棄間近の商品や廃材から

できた商品)やサービスなどに、SDGs の 17 項目の内どの項目を達成できるのかということを見視化したもの貼るという案を考えました。そして、東大阪市民の方々に自分ゴトとして捉えてもらいやすくするために、この SDGs ラベルを貼る商品の 1 つの例として、ラグカレーパンを使用するという形になりました。

この SDGs ラベルがもたらす効果の 1 つ目としてまず、今回のプロジェクトのゴールでもある、東大阪市民の方々に SDGs を意識してもらえるようになることが挙げられます。2 つ目の効果として、廃棄間近な商品や、廃棄商品を使用した商品にこのラベルを貼って販売することで、ゴミの減少に繋がり、ゴミを焼却する際に排出される二酸化炭素を減少させることができるということが挙げられます。そして 3 つ目に、この取り組みに様々な企業の方に協力していただくことで、企業側にとっても社会貢献度が向上する効果が期待できると考えました。

### 3. 東大阪が目指すべきゴール

今回の活動を通して、東大阪が目指すべきゴールはこの SDGs ラベルの商品やサービスを扱っていただける企業を増加させ、東大阪市民の皆様に SDGs ラベルを浸透させることだと私たちは考えました。また、東大阪市民の皆様に SDGs ラベルを通して、SDGs を自分ゴトとして捉えていただき、その波を東大阪から全国に広めることもゴールの 1 つだと考えました。

東大阪市の市民にとって、東大阪市以外に住んでいる市民の方から見ても、ものづくりの街のイメージやラグビーの町と言うことは明らかであり、住んでいる市民もイメージ自体が浸透していることは誇りに持って生活しています。ある意味このようなイメージは東大阪市に住んでいる市民の愛着や心のよりどころになっていることだと思います。ただ、ラグビーやものづくりの町というのは、必ずしもその市民全員が携わっているというわけではなく、ものづくりに関してはもの作りをしている企業や商業などが多くあり、必ずしも東大阪市民全員がもの作りに関わっているわけではありません。ラグビーについても、日本を代表するラグビー場という誇るべきものやラグビーの歴史があるが、市民全員がラグビーやっているわけではなく、例えば主婦層にとっては自分の子どもがやっているなど間接的に関わっていることがあると思います。必ずしも自分たちがやっていることが、必ずしも SDGs の取り組みというものに繋がるとは限らないが、自分たち一人ひとりが消費する行動や意識が後に市民全員がやる行動に代わり、自分たちの行動が SDGs に貢献していることを意識することになり、この意識が東大阪市民としての支えになります。自分たちのやっている活動が市民全員のやっている活動に代わるということで、これまでのものづくりやラグビーの町とは違った一つの東大阪市の柱に

なるというふうに考えます。

SDGsの提案が実現されるということは、東大阪市民にとってのアイデンティティが全員に携われます。全員共通のものが生まれることは、非常に大きな意義を持っているということであり、新しい柱ができるということはあらゆる買い物や消費活動の中で、SDGsを常に意識した市民であるということ、市民全体が誇りをもっていけるような東大阪に変化すると考えています。そのためには SDGsの目標は目指すだけでなく、行動することが第一歩と考えます。

また、市民だけではなく東大阪で商業活動する企業があります。そういった企業が、自分たちがSDGsに貢献したいという理念を持っていた時に、具体的な実現の方法が分からないということがあると思います。そういった実現の仕方がわからない時に、東大阪で商業活動をするのが SDGsにつながると、自分たちが掲げる社会貢献の理念を実現できるのが、東大阪であると全国の人々に知らせていると、企業自体が東大阪の商業活動をするために集まってくる、そういった効果も期待できると考えています。東大阪に新しい柱が立つだけでなく今勢いのある商業や企業にさらに勢いをつけることができると考えています。

#### 4.所感

今回の東大阪市の SDGsプロジェクトを通して、学内だけでは得られない多くのことを得ることができました。特に、大学も学年も違うメンバーでプロジェクトを進めることができたことは貴重な経験になりました。このプロジェクトは他大学間で協力して行ったので、対面で合うことが難しく、リモートでの作業がほとんどでした。コロナ禍で大学生活を過ごしてきたのでリモートワークに慣れていて私たちは感じていましたが、実際にやってみると、リモートではお互いの予定を合わせることや意見のすり合わせをすることが難しかったです。その中で納得のいく発表ができるようにするには、タスクごとに期限を決め、全員が主体的に取り組むことがスムーズに作業を進めることに繋がると感じました。

このプロジェクトでは 4 つのグループに分かれて課題解決案を出したので、それぞれのグループから得られることが多かったです。あるグループは発表の際にクイズを出すことで観客を引きつける工夫をして、またあるグループではアイデアの見本を用意して、より具体性を持った発表にしていました。他のグループの発表には私たちが思いつかない工夫がおおく詰め込まれていたのも勉強になりました。また、小口さんからのフィードバックは非常に的確で、私たちのレベルを引き上げてくれました。最後の HANAZONO EXPO で自分たちのアイデアが選ばれなかった原因を考えた

きに、私たちはアンケートを取るなどしてアイデアに具体性を持たせることができなかつたことが敗因だと考えました。しかし、小口さんは、データがあればわかりやすいが、それ以上に何を伝えたいかがわかるようにすることが大切だと仰っていました。アイデアを実現するとどのような未来があるのかが想像できるようにして、聞いている人をワクワクさせることが大切だったのです。私たちの発表では、実現後の未来を見せるという部分が弱かつたので、もっと掘り下げて発表ができていれば結果も違つたのかなと思いました。

このプロジェクトを進めるにあたって SDGsや東大阪市のことを知るよい機会になりました。プロジェクトを始める前は、SDGsという言葉は知っていてもその中身までは詳しく知らないという状態でした。そこで、アイデアを出すためにまず私は、日本のSDGsという大きなくくりで勉強しました。すると、普段のニュースではなかなか取り上げられないことについて知ることができ、社会問題への関心が高くなりました。また、私は東大阪市の出身ではないので、東大阪市の名物や課題についてよく知りませんでしたが、それらを調べていくなかで東大阪市の魅力にも気づくことができました。

小口さんが仰っていたように、私も今回で SDGs への取り組みは終わりではないと思います。アイデアを考えるに当たって学んだこと、意識したことを活かして今後も SDGsに取り組んでいきたいと思っています。

最後に、小口さん、東大阪市役所企画課のみなさま、今回のプロジェクトに参加させていただきありがとうございました。

# 活動報告書

C:「東大阪市の魅力爆発計画」班

## C 班活動報告書

### 1. 東大阪市における課題

食品ロス(フードロス)とは、食べ残した料理や野菜の切れ端など、まだ食べられるにもかかわらず廃棄されている食品を指します。

農林水産省によると、日本で発生する食品廃棄物は約 2,510 万トン、そのうち食品ロスは令和 2 年度で約 522 万トンです。247 万トンが家庭から、275 万トンが事業所から発生しており、この食品ロスの発生量を日本人 1 人当たりで換算すると、お茶碗 1 杯分(約 113 グラム)と同じ量の食べ物を毎日捨てていることになります。

東大阪市では、市民・事業者・各種団体と連携しながら 2030 年度までに食品ロス発生量を対 2000 年度比で半減させることを目標に、食品ロスの削減を推進していくため「食品ロスの削減の推進に関する法律」に基づいて、令和 4 年 3 月に「東大阪市食品ロス削減推進計画」を策定しました。

令和元年度に東大阪市で発生した可燃ごみは約 87,000 トンで、そのうち家庭系食品ロス発生量は 15,500 トン、事業系食品ロス量は 14,000 トン、合わせて 29,500 トンと推計しており、これを令和 12 年度までに 22,000 トンに削減することが目標となります。

令和元年度比で令和 12 年度までに食品ロスを 7,500 トン削減するためには、平均すると毎年、前年度比で 682 トン減らしていく必要があります。

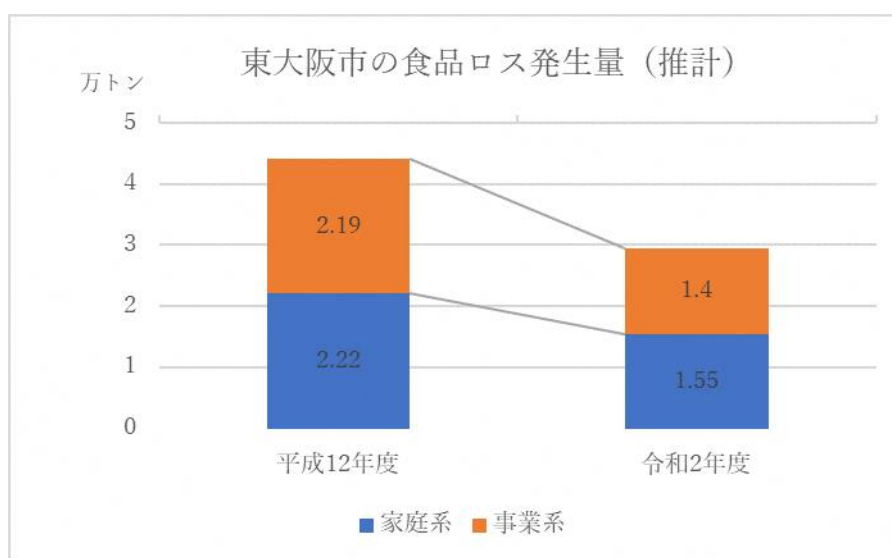


図 1 - 東大阪市の食品ロス発生量 (推計)

## 2.解決方法

私たちは、このフードロス問題を解決するために、「フードロス削減カレーパンプロジェクト」という企画を提案しました。この「フードロス削減カレーパンプロジェクト」とは、フードロス削減につながるカレーパンレシピを募集、選考を行い、選考の結果、入賞したカレーパンのレシピを集めてレシピ本を作成、優秀賞に選ばれたカレーパンは商品化するという企画です。

まず初めに、どのようなカレーパンのレシピの募集を行うのかについて説明します。この企画で募集するレシピは、例えば普段捨てるような野菜の切れ端を使ったカレーパンのレシピや、食べにくいパンの耳をカレーパンの衣にリメイクするレシピなど、フードロス削減につながるカレーパンのレシピです。また例えば、「残り物で省エネカレーパンレシピ」というように、フードロスだけでなく、「省エネ」つまり、SDGs7番目の目標、「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」といった、他のSDGsの目標達成を意識したレシピは選考の際に非常に有利になります。

次に入賞レシピの選考方法について説明したいと思います。選考するにあたって、応募者の方々に、実際に応募したレシピのカレーパンを振舞っていただくお祭りを開催します。その際、応募者の方々には、自分のレシピのアピールポイント、さらにはそのレシピが貢献するSDGsマークの説明を行って頂きます。最終的には、主にこのお祭りに来場して頂いた方の投票で、入賞者、さらには優勝者を決定します。また、このお祭りで、フードドライブも同時に実施したいと思います。フードドライブとは、各家庭で余った食品を集め、専門の団体や地域の福祉施設に寄付する活動のことを指します。フェス会場に、応募者や来場者の方から、各家庭で余った食品を募るブースを作りたいと考えております。この活動もフードロス削減につながります。

次に、なぜ数ある料理の中でもカレーパンを題材とするのかということについて説明します。東大阪市にはカレーで有名なハウス食品さんの大阪本社があること、そしてここ花園中央公園といえば花園ラグビー場、ラグビーといえばラグビーボールということで、カレーパンの形がラグビーボールの形に似ていることから、東大阪市はカレーパンの街として様々な活動が行われています。そのことを知った私達は、東大阪市のシンボルであるカレーパンを通して、フードロス問題により多くの人に取り組んでいただきたいという想いから、フードロス問題とカレーパンを組み合わせたこのプロジェクトを企画しました。また、カレーパンの中身であるカレーは、野菜の切れ端など余りがちな食材を美味しく、そして一気に消費しやすい料理であり、フードロス削減に大活躍してくれます。

## 3.実現したら、東大阪市に起きる変化

私たちが提案した「フードロス削減カレーパンプロジェクト」は、東大阪市だけでなく日本や世界で発生しているフードロス問題の解決への一歩となることを目的としています。このプロジェクトが成功することで東大阪市に起きる変化を、二点あげたいと思います。



一つ目は、この企画の主な目的であるフードロス問題の解決に貢献できるという点です。この企画に参加することで、レシピを考案してお祭りに出店する人だけでなく、来場者も楽しみながらフードロス問題について興味を持っていただけたと思います。このプロジェクトを通して、一時的ではなく持続的に SDGs について考える人が増加し、今まではどこか自分には遠い話だと感じていた SDGs に対して、自分達でも身近で簡単に取り組めるものがあることを知ってもらえるのではないかと考えています。この企画をきっかけとして、東大阪市民の方一人一人にフードロス問題を意識して頂くことで、やがて東大阪市全体のフードロス削減につながることを期待できます。

二つ目は、東大阪市民の方々の健康を促進できるという点です。このプロジェクトの実施によって起こるフードロス削減への効果について述べてきましたが、ここからはカレーパン自体がもたらす効果についても述べていきたいと思います。カレーパンの中身であるカレーには様々なスパイスが入っています。例えば、色付けに使われるターメリックの中にあるクルクミンという成分は、肝機能の向上やアルツハイマー病の予防に効果があると言われていています。さらに、カレー特有の香りを作るクミンは、消化促進の作用もあると言われていています。スパイスは昔から薬として用いられてきたため、スパイスが多く使用されているカレーは健康に良いと考えられます。またカレーには多様な種類の食材を入れることができるので、自分の好み・健康状態に合ったカレーパンを楽しめます。しかしカレーパンは揚げるのが一般的なもので「健康に悪いのでは」と思われる方がいらっしゃるかもしれませんが、揚げない焼きカレーパンやパンの生地を全粒粉のものにしたりなど工夫を凝らすことで、ヘルシーなカレーパンを楽しめます。自分の健康に気遣ったカレーパンを作ることで、SDGs の 3 番目の目標である「すべての人に健康と福祉を」の達成に貢献できると考えられます。

これらの点から、「フードロス削減カレーパンプロジェクト」は、フードロス削減はもちろん、市民の皆様が健康になれる企画となっています。この企画が実現され、東大阪市がフードロス問題解決のモデル都市のような街となることを私たちは願っています。さらに、東大阪市がカレーパンの街であることを知らなかった市民の方もいらっしゃると思われるので、このプロジェクトを通して、市民の方々に「東大阪市=カレーパンの街」というイメージを浸透させ、東大阪市にさらに魅力を感じてもらおうきっかけになることを期待しています。

#### 4.所感

東大阪市にある大阪商業大学、大阪樟蔭女子大学、東大阪大学、近畿大学の学生が、大学の垣根を越え、協力して今回のプロジェクトに取り組みました。その中で私たち C 班は「フードロス削減カレーパンプロジェクト」という企画を提案いたしました。この企画は上記でも説明させていただきましたように、フードロス削減を主に目的とし、普段捨ててしまうような食材を使ったカレーパンのレシピを募集、そして選考にあたってお祭りを行うというものでした。私たちのグループがこの企画の提案を行う上で特に重要視したのは、「東大阪市ならではの企画である」ということ、また「東大阪市民の皆様 SDGs を身近に感じて頂く」ということです。そのためには、まず私たち自身が、東大阪

市について知らなければならぬと考えました。そこで見つけた題材がカレーパンになります。東大阪市について学ぶ中で、東大阪市がカレーパンの街と呼ばれているのを知り、東大阪市にゆかりのあるカレーパンを通して市民の皆様が SDGs をより身近に感じられるようになる、また参加型で誰でも楽しめる企画を提案したいと考え、今回のプロジェクト発案にいたりしました。

ここからは今回のプロジェクトを振り返ってみての反省点を幾つか述べていきたいと思います。

一つ目は、具体的なデータを上手く活用出来なかった点です。アンケートを実施してデータを集めたり、参考文献を探して引用したりなど、データを上手く活用することでさらに具体的で、説得力のあるプレゼンテーションが出来たのではないかと思います。

二つ目は、実現性の低さです。今回の企画を実際に実施するには、イベント開催のための資金調達やレシピ募集・投票方法、衛生面の問題など、問題が山積みであり、実現性の低さが目立ちました。もっと実現性の高い案を出せるように、実現した際のシミュレーションを行いながら、細かいところまで企画を練るべきだったと感じています。また、募集したいレシピを分かりやすく説明するために、実際に私たち自身で、フードロス削減につながるカレーパンのレシピを考案し、試作品を作るとさらに良かったのではないかとこの意見もチーム内で出ました。

三つ目は、観客に問いかけるなど、周りを巻き込むようなプレゼンテーションを行えなかった点です。他の班では、観客の方々へ向けてクイズを行うなど、観客の方に参加してもらおうプレゼンテーションを行っていました。私達も、観客の方々を引き込むプレゼンテーションを行えるように、プレゼンテーションテクニックを勉強し、取り入れてみるなどもっと練習を重ねるべきだったと感じています。

今回は東大阪市版の SDGs というテーマで私たちは活動を行ってきました。その中で、SDGs の歴史や東大阪市における SDGs 問題、さらには自分達でも身近で簡単に取り組める SDGs への貢献活動など、本当に多くの事を学びました。今回のプロジェクトで学んだことを周りの人に発信しながら、今後の自分の生活にもしっかり活かしていきたいです。この度は、多くの事を学ばせていただき、また貴重な経験をさせていただき本当にありがとうございました。

# 活動報告書

D:「1日1回SDGsプロジェクト」班

## D 班活動報告書

### 1. 東大阪市における課題

東大阪市には技術力の高い中小企業が多くあり、“モノづくりのまち東大阪”として有名です。多種多様な企業が多く集まっており、歯ブラシやカバン、家具など私たちの生活で身近に存在しているものやネジやボルト、ナットなどの部品から人工衛星など最先端なものまで「なんでも」製造してきました。小さな町工場から作り出される製品は、東大阪市だけではなく全国や世界でも活躍しているのです。

そんな日常の暮らしには欠かせないものから世界的にも活躍する最先端なものまで、幅広い技術でなんでも作り出す“モノづくりのまち東大阪”ですが、現在町工場には課題が多くあります。

「東大阪内製造業の事業承継の実態に関する調査-まとめ-」によると、現在の経営者の年齢は65歳以上の割合が48.6%で約半数近くを占めており、経営者に就任してからの年数は、20年以上が53%と半数以上を占めていました。また、65歳から69歳が21.4%で最も高く、逆に39歳以下の割合が2.7%で最も低かったです。

今後の事業承継の予定では、「後継者決定、事業を承継する」が29.5%と最も多かったです。その一方で「事業継続の意思なし」が20%もあり、廃業を視野に入れている企業も多くあります。「後継者候補がないが、承継の意思あり」と答える、後継者不足に悩む企業が1割強存在しており、経営の状況が「順調(とても順調・やや順調)」の企業でも、「事業継続の意思なし」や「後継者候補がないが、承継の意思あり」が一定の割合存在しており、後継者不足の状況が見てとれます。また、「市内中小企業動向調査報告(令和2年1月～3月期)」によると、コロナウイルスの影響により「マイナスの影響がある」との回答が最も多く、半数の割合を占めていました。最も影響が多かったのは「来客・受注の減少」で約8割、次に「契約・予約のキャンセル」で約2割ありました。この他にも「工場・機械の老朽化」、「技術者の不足」、「人件費の増加」、「管理者の不足」、「競争の激化」、「一般従業員の不足」、「納入先等からの値下げ要求」、「仕入先からの値下げ要求」、などがあります。このような問題が多くなってきているため、新たな起業を見つけることが難しかったり、将来性がないから継続せず、廃業してしまう企業も多くなっています。

後継者不足の問題とコロナウイルスの影響による企業継続の困難が重なり、企業が減少していたり、技術者の不足により技術が受け継げなかったりと“モノづくりのまち東大阪”に危機が迫っています。

## 2.解決方法(=今回の取材内容)

今回我々が考えた解決方法はエコバッグを作るという方法です。しかしながら、ただ単にエコバッグを作るだけではありきたりすぎます。他と違う、東大阪ならではの何かと組み合わせられればいいなとなりました。そこで、エコバッグは何からできているのか、そこから意識してもらおうとなりました。布は糸からできており、糸はペットボトルからリサイクルされてできます。私たちの発表は一番最後の4番目だったので普通の発表では面白くないと考え、クイズにしてみんなの注意を惹きつつ、息抜きになればいいと考えました。そこで上記の内容をクイズにして最初に行いました。司会者がゆーちゃみさんに話を振ってくれたことも重なり、発表を聞いてくださった皆さんにも印象に残ったと思います。

このつながりで提案した企画の中に川のごみ拾いを組み込みました。この狙いは3点あります。1点目は川にはたくさんのプラスチックごみが捨てられているという意識を持ってもらえるという点です。実際に自分で拾ってもらうことにより、データで見るよりも身をもって理解できます。2点目はごみのポイ捨てを減らせるという点です。川のごみは1人の「まあちょっとぐらい捨ててもいいだろ。」が積み重なって増えていくものです。もしかしたらこの記事を読んでいる方になかにも過去に捨てた経験があるかもしれません。その意識改善にもつなげることができると考えました。3点目はリサイクルのすばらしさを体験してもらうことができるという点です。自分たちで頑張って拾い集めたものが形を変えて手元に戻り、ごみだったものが活躍するすばらしさを体験できるのは貴重な経験です。そして完成したエコバッグに自分でペンやスタンプを使って世界に一つだけのオリジナルエコバッグを作ってもらいます。そこにSDGsのマークのピンバッジも付けます。そうすることによりこれはSDGs関連のものと示すことができ、周囲の人の注意関心を引く効果も期待されます。完成イメージは下の写真です。



ここまでの川のごみ拾い、エコバッグのデザインは全て小学校のイベントで、子供たちに行ってもらいます。完成したものを母の日に合わせて保護者にプレゼントしてもらいます。子供は日頃の感謝を伝えることができ、保護者は子供の作品を手元に置いて使うことができ、地球の環境にも良い、全てにおいて良いことしか起きない企画にすることができます。東大阪には公立小学校が51校あります。毎年この企画を実施することにより、歩く広告の効果も期待され、徐々に規模を拡大していき、小学校以外の機関でも実施されるようになれば、東大阪が誇る世代を巻き込んだSDGs企画にすることができます。

### 3.実現したら東大阪に起きる変化

私たちの班が考えた小学生などを対象にしたエコバック作りが実現されると、次世代に SDGs というのを次の世代にも伝える事が可能となって取り組みが途切れる事なく続けることが出来ると思っています。そして一人一人の SDGs に対する価値観や認識率が変わっていくとも考えられるので身近なところから市民の方々が参加出来ると考えています。

そしてこの取り組みでは小学生が家族にプレゼントということなので親も SDGs について学んだりするので機会が増加して、家族の話題の一つにまた家族の仲も強くなって他にもプラスチック製品の購入頻度が減少するのではないかと考えられます。(図 2)

このエコバックをプレゼントという取り組みを行う事により現在は全国の国民 1 人当たり 1 年間で約 150 枚あたりレジ袋を使用していると推定されているので家族に 1 枚だけでなく、家族の人数分を渡すことによって 4 人家族だったら年間で約 600 枚レジ袋を減少させることが出来ると考えています。

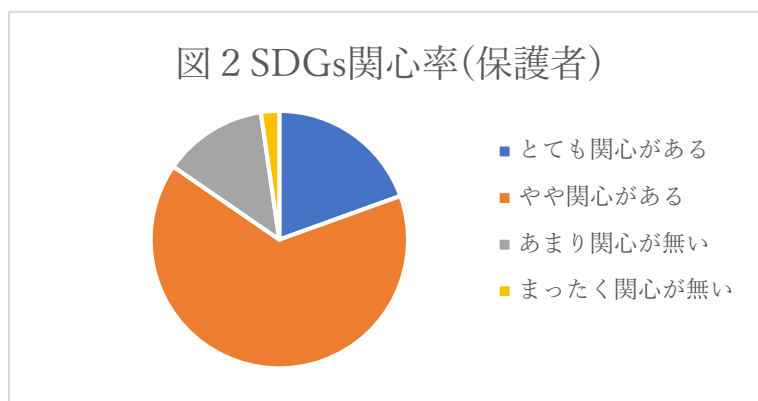
全国規模で見ると

業種	辞退率(有料化前)	辞退率(有料化後)
コンビニ	25%	75%
スーパー	57%	80%

ドラッグストアでは使用量が 84%も減少している事が分かっています。

他にもレジ袋の流通量も大幅に減少しており 19 年の 20 万トンから 20 年は 35%減の 13 万トンとなっている事が分かっています。

このような事から東大阪でもエコバックの所有率が増加すると、プラスチックの使用量が大幅に削減されると推定されます。



減されると推定されます。

他にも東大阪は大阪府の中で 3 番目に人口が多いので買い物などに行った際にレジ袋の利用頻度を減少させることで、大いなる発展が現れるのではないかと考えています。

参考文献

<https://sdgsonline.jp/17366/>

<https://www.city.higashiosaka.lg.jp/cmsfiles/contents/0000002/2146/shogyojittai.pdf>

(最終閲覧日 令和 4 年 11 月 23 日)

#### 4.所感

発表当日、いつもはテレビでしか見ることのできないタレントさんや、東大阪市 SGDｓ アドバイザーの小口さんが審査員につき、大きなステージでプレゼンするという状況に、ステージ裏では非常に緊張していました。しかし、実際にステージ上に立ってみると、不思議と緊張感がなくなり、最善を尽くしたプレゼンができたかと思います。

今回私たちの良かった点としては、2つあると考えております。

1つは、プロジェクトを実施する際のターゲットが定まっていたことです。一からエコバッグを製作する「公立小学校に通う小学生」と、エコバッグをプレゼントされる「その子供の母親」です。東大阪市には公立小学校が51校あり、生徒数×その母親の数にアプローチすることができます。

2つ目は、序盤のSDGsクイズで会場を巻き込み、場を盛り上げることができたことです。審査員の方たちも快く参加してくださって、優勝まではいかずとも納得のいくステージになりました。

逆に、今回の改善点は3つあります。

1つ目は、プロジェクトを実施するのにかかる期間が長いことです。小学生がごみ拾いをして、そのペットボトルをエコバッグにリサイクルして小学校に送り、各自デザインしてプレゼントするという一連の流れが非常に長くなると考えられます。また、その具体的なスケジュールを定めてスライドに入れた方が見ている方にとってわかりやすかったのだろうなと思いました。

2つ目は、収支計画を入れていなかったことです。本プロジェクトを実施するのに、どこでどれくらいの費用が掛かるのかを資料に入れることで、もっと現実味を感じられたはずで

3つ目は、発表の際に台本を見て発表していた点です。台本を見ずに発表することはマストではありませんが、もっと理想形に近づいたら台本を覚えて、完璧に発表してみたかったです。

とはいえども、HANAZONO EXPOのようなイベントであんなに大きなステージで発表できたこと、他大学の学生と交流ができたこと、チーム対抗戦ということもあって一致団結してプロジェクトを進めることができたことは、本当にいい経験になりました。反省点も含め今回経験できた内容は、これからの将来に絶対活かすことできるし、資料作りや大勢の前で発表するということに自信を持てるようになりました。

4大学のプロジェクトメンバー、小口さん、その他関係者の方々、そして東大阪市役所の皆さま、本当にありがとうございました。